
インスタント・メンバー

柊柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インスタント・メンバー

【Nコード】

N2485J

【作者名】

柊柳

【あらすじ】

藤堂家に召集された原田を含めた四人は、藤堂家の一人娘である藤堂ゆかりの我侷により、とあるゲームの作成をやらされる。

強制召集

青天の霹靂と言う言葉がある。

急に起きる変動。または大事件。

他に、突然受けた衝撃と言う意味を持つ言葉で、今の状況はまさにその言葉が適切であったと言えるようか。

俺こと原田悠太はどこにでもいるごく普通の高校二年生である。

百人中百人にアンケートをとれば「普通だ」と答えが返ってくる自信があるね。もしくは「地味だ」と第一声をもらうことであろう。

そんな俺こと原田悠太は突然の強制イベントの襲来に未だに状況を把握しきれずにいた。

2

「では、全員集まったわね！」

意気揚々と声を上げる少女は目を点にさせて己を注視している四人。俺を含めて。を見て、満面の笑みを浮かべる。

「初めまして、皆様様方。私は藤堂ゆかりと申します」

藤堂ゆかりと名乗った少女は深々とお辞儀をする。物腰柔らかく

お辞儀する姿に少々目を奪われていると、他の三名も「初めまして」とお辞儀していることに気付き、慌てて俺も一礼する。

その後、俺の隣で座っていた少女　どう見ても小学生としか思えない小柄な少女が「あのお」と申し訳ない程度に拳手をして話しかけた。

「何ですか、近藤恋さん。」質問は話しが終わってからにして欲しいんですけど」

「あ、あう。ごめんなさいです」

「まあ、いいですよ。それでなんですか？」

「……先ほど『藤堂』と申しましたけど、もしかしてあの『藤堂』ですか？」

あの藤堂？

近藤恋の疑問は他の二名も同様だったのか、こくこくと首を縦に振ってジツと藤堂さんを見ている。

どうやら三人には藤堂と言う苗字に心当たりがあるらしい。

「そうよ。それが何か？」

「何か、じゃないわよ」

小首を傾げて不思議がる藤堂さんに今度は俺の反対側にいた少女が口を挟む。

瞳の色が特徴的な少女　　俗に言う碧眼　　は威圧的にテーブルを叩きながら立ち上がる。

「あの藤堂の人間が私達に何の用な訳よ！　こっちは訳も分からずに連れて来られたのよ」

「それをこれから説明するつもりでしたのよ、神楽坂優菜さん」

「それは藤堂の仕事と何か関係があるんですか、藤堂さん？」

「ご立腹の少女、神楽坂優菜と呼ばれた隣の少女が問う。

緊張している俺や困惑していた近藤さん、そしてご立腹な神楽坂さんと違って、彼女だけがのんびりと用意されていた紅茶と茶菓子を戴いていた。

褐色の肌に巫女服とミスマッチ姿の少女の言葉に藤堂さんは「そうですね、今井七恵さん」と頷く。

「本日お集まりしていただいた方々には、とある仕事を受け持つてもらいたいですよ」

……仕事？

この面子で受け持つて欲しい仕事とはいったい何だろうか。

俺は興味半分不安半分の思いを抱きつつ、拳手をしながら口にする。

「あの」

「何ですか、原田さん。さっきも言いましたが、質問は話しが終わってからにして欲しいのですけど」

「あつ、それはすみません。けど、どうしても気になって。先ほど『あの藤堂』やら『仕事』と申しましたが、あなたは一体何者なんでしょうか？」

疑問に思っていた事を口にするると四者から「えっ!？」と驚愕のお言葉を貰い受ける。

全員「何を言っているのこいつ。信じられない」と言わんばかりに眼を大きく見開き、俺を見ている。

藤堂さんなんか、その質問が来ると思っていなかったのか口をあぐりと開きっぱなしのまま、啞然と俺を見ている始末。

「キミ。遊樂の藤堂って知らないの?」

マズツタかな、と困惑する俺に向けて、神楽坂さんが小声で話しかけてくる。

「遊樂の藤堂？ それってゲーム業界に名を馳せた……えっ!？」

思わず藤堂さんの方に視線を向ける。

ようやく理解した俺に対し、藤堂さんは何も言わず一つ頷くだけ。

お隣の近藤さんから「ニブチン」とお小言を貰いながらも、俺は驚愕の声を上げた。

「ちよつと待つて！ 遊樂の藤堂って、アミューズメント業界に名を馳せた藤堂家!？ 一年の年収だけで一生暮らせる額を稼いでいるあの……」

「今頃気付いたんですか、原田悠太さん」

「気付くも何も、いつものように起床したら突然、黒スーツの人達が押し寄せて『ご同行願います、悠太様』と言って強制的に連れて来られたんだぞ」

あの時は借金取りが来たのかと本気で思ったよ。

何気なく懐に手を伸ばしたとき、殺されると思ったぐらいだからな。

「さて、私の正体が分かったところで、早速ですが皆様にご仕事を頼みしたいのです」

気を取り直した藤堂さんは脇に置かれていた鈴を鳴らす。

鈴は呼び鈴の役目をしているらしく、鈴の音がなった数秒後にはメイド姿の女性が多量の本を持ちながら入室してくる。

「私が皆様方をおよびしたのは他ではありません。あなた方には」

「くじり。」

気が付いたら生唾を飲んでいた。

何が何だか正直理解の範疇を超えていたが、どうやら自分達とはんでもない仕事と言う奴を押し付けられるらしい。

あの藤堂家の仕事をどうして自分達が手伝わないといけないのか、と言う疑問はあるが、どうやら自分達に拒否権と言うものはないらしい。

「あなた方にはゲームを作ってもらいます」

「……は？」

高らかに伝えられた藤堂さんの言葉に俺を含めた四名は素っ頓狂な声を上げるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485j/>

インスタント・メンバー

2010年12月30日01時57分発行